# 読書

## 須賀敦子の方へ

松山 巖著

いま、須賀敦子の文学が静かなリバイバルを迎えている。「須賀敦子ふたたび」と題されたムックが出たり、著書が文庫化されたり。横浜では彼女の展覧会も開かれる。そして、生前の須賀と親交の厚かった著者による、読者の心をまさに「須賀敦子の方へ」と向かわせる本書が出版された。

本書は須賀敦子の晩年にまつわる思い出や彼女のエッセーからの引用を随所にちりばめながら、子ども時代から24歳でフランスに留学するまでの若き日々を集中的に扱っている。評伝と呼びたいところだが、趣は多少違うようだ。

### 時空を超えた対話

手紙、人々の証言、彼女が読んでいた本、歩いていた地域。丹念に須賀敦子を追跡、追憶し、そのエッセーからの引用を随所にちりばめながら、子ども時代から24歳でフランスに留学するまでの若き日々を集中的に扱っている。評伝と呼びたいところだが、趣は多少違うようだ。

須賀敦子はその端正なエッセーによって1990年代、大いに注目の作家となったが、病魔に倒れ、活躍できた時期は短かった。没後、全集が出版されたが、その編集にもあたった著者は、本書のなかで須賀の叙述をなぞるだけではなく、彼女が書かなかったことにまで推理をめぐらしている。

例えば、森鷗外の史伝「渋江抽斎」をめぐって、須賀父娘の間にどのような気持ちのやりとりがあったのか。須賀敦子が庄野潤三の小説「夕べの雲」に「本能的に」惹かれ、それをイタリア語に訳した理由は何か。ナタリア・ギンズブルグの「ある家族の会話」と須賀のエッセー集には、どのような呼応関係が見られるか。そして、戦後、カトリック学生連盟の活動に参加しながら、彼女が考えていたこととは…。

著者が須賀敦子に聞いてみたかったであろう、たくさんのことが、本書には詰まっている。そのように何年間も向き合い続けられる作家を持つことの幸せを思う。いろいろな須賀敦子の姿が、見えてくる本だ。

（松永美穂・早稲田大教授）

「渋江抽斎」をめぐって、須賀父娘の間にどのような気持ちのやりとりがあったのか。須賀敦子が庄野潤三の小説「夕べの雲」に「本能的に」惹かれ、それをイタリア語に訳した理由は何か。ナタリア・ギンズブルグの「ある家族の会話」と須賀のエッセー集には、どのような呼応関係が見られるか。そして、戦後、カトリック学生連盟の活動に参加しながら、彼女が考えていたこととは…。

著者が須賀敦子に聞いてみたかったであろう、たくさんのことが、本書には詰まっている。そのように何年間も向き合い続けられる作家を持つことの幸せを思う。いろいろな須賀敦子の姿が、見えてくる本だ。

（松永美穂・早稲田大教授）

（新潮社・1944円）

## 誰が星の王子さまを殺したのか

安冨 歩著

本書は「星の王子さま」の謎を鮮やかに解き明かす。第2次世界大戦中、サンテグジュペリがナチスから逃れて米国に亡命し、アフリカへ志願出征する直前に発表された「星の王子さま」は、政治的な意味も含め、さまざまな解釈を生んできた。しかし、謎めいた登場人物はなかなかその〝真のメッセージ〟を明らかにしてくれない。

本書ではこれまでに繰り広げられた解釈を覆すような議論が展開する。小さな手がかりを糸口に切り込んでゆくその手法は見事というほかない。副題にもある「モラル・ハラスメント」とは、一見無害なコミュニケーションを装って人の心を支配し、かつその苦しみは自身のせいだと誤信させる精神的暴力。それは夫婦や恋人、親子、友人関係、また会社や国家と個人の間にも忍び込み、人間の魂を奪う。ハラスメントにとらわれたとき、人間は自らの魂の主人であることをやめてさまよい、そしてそのさまよいが示されるにいたって、本書は意外な一貫性をもって結論を導き出す。

### 死に至る謎を解く

王子はなぜ自分の星を去らねばならなかったのか。自由に旅をしているはずの王子はなぜヘビに自らをかませて倒れたのか。その謎を解く旅を、夜空の深い色と星に彩られたこの美しい本とともに味わってほしい。それはわれわれ自身のとらわれを解く旅でもある。

（深尾葉子・大阪大准教授）

（明石書店・2160円）

## 目ミゴロです

### 跳びはねる思考

東田 直樹著

「苦しくてたまらなくなると、空を見上げます。目に飛び込んでくるのは、抜けるような青空と白い雲です。見ている僕はひとりぼっちなのに、世界中の人とつながっている気分になります」

人と会話ができず、奇声を上げて跳びはねたりする重度の自閉症の東田直樹さんが、文字盤やパソコンを使い、一語一語を紡ぎ出したエッセー集だ。コミュニケーションに困難のある自閉症者が多い中、表現される内面の豊かさに驚かされる。

### 世界とつながる言葉

自閉症は「まるで壊れたロボットの中にいて、操縦に困っているような状態」という。家族と共に泣き、抱きしめて「大丈夫」と言われて初めて「人間として」の一歩を踏み出せる感じなのです」。心い、一語一語を紡ぎ出した」と振り返る。

「自閉症者の言動は謎だらけで、奇妙にさえ感じるかもしれません。この社会の中に、僕の居場所はないのです」と吐露しつつ「しかし、思考は、どこまでも自由なのです」と、自分が生きる世界をのびのびとつづる。

「山も木も建物も鳥も、全てのものが一斉に、僕に話しかけてくる感じなのです」。心ひかれたものとの、言葉によらない対話には「存在同士が重なり合うような融合する快感」があるそうだ。

13歳の時、自閉症をめぐる疑問に答える形で書いた「自閉症の僕が跳びはねる理由」（エスコアール）が昨年、英国で翻訳出版され、20カ国以上で評判に。国内でも今夏、NHKの番組で紹介され、一気に注目された。

「僕にとって文章を書くことは、息をするのと同じくらい自然なこと」と東田さん。体は思い通りに動かなくても、心の奥で磨いた言葉で世界の人とつながった。

（竹）

（イースト・プレス・1404円）

## 楽読楽書

### ▼歴史・時代小説

### 黒龍荘の惨劇　怪奇事件の陰に怪物

岡田秀文「黒龍荘の惨劇」（光文社・1836円）は、探偵の月輪龍太郎と友人の杉山潤之助が難事件に挑む時代ミステリーの第2弾。本書から読んでも問題ないが、著者の代表作になる可能性が高い傑作シリーズなので、これを機に前作「伊藤博文邸の怪事件」を読むことをお勧めしたい。

元首相の山縣有朋の金庫番ともいわれる漆原安之丞に脅迫状が届き、その数日後、漆原が首を切られた死体となって発見される。漆原の秘書から捜査を依頼された月輪は、漆原の邸宅、黒龍荘へ向かう。

やがて事件は連続殺人に発展する。惨劇の舞台は不気味な館。関係者は死後も漆原におびえ、被害者は漆原の故郷に伝わるわらべ唄に見立てられ、首や手足を切断されるなど、物語は本格ミステリーの王道ともいえる道具立てを使いながら進む。

本当に解決するのかと思わせる終盤まで殺人が続き、月輪は16もの疑問点に頭を悩ませる。事件が複雑怪奇なだけに、たった一つのカギでナゾが一気に解ける最終章には圧倒的なカタルシスがあり、ミステリーマニアも満足できるはずだ。

驚くべきどんでん返しから浮かび上がるのは、法律やモラルなど歯牙にもかけない怪物の存在である。この怪物は、現代とも共通する虚無を象徴しているので、背筋が凍るだろう。

6月、「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界文化遺産に登録された。翔田寛「探偵工女」（講談社・1620円）は、創業まもない明治6年の富岡製糸場を舞台にしたタイムリーな作品である。

糸繰りの工程や工女の生活などが、観光ガイドとして使えるほどリアルに描かれているのも、作品の魅力となっている。

東京で反政府派が摘発され、テロ計画のメモが発見された約1カ月後。皇太后と皇后の訪問を目前にした富岡製糸場で、工女たえの死体が密室状態の石炭小屋で発見され、友人のいとが失踪する事件が発生した。事件とテロの関係を疑う政府は、桐野警部を現地に派遣。第一発見者になった尾高惇忠工場長の娘、勇も事件を調べ始める。

事件には、技術指導をするお雇い外国人への偏見や、明治維新という時代の激変によって格差が広がっていた史実など、現代とも無縁ではない社会問題がからんでいることも分かってくるので、勇が明らかにする真相が生々しく感じられるはずだ。

（末國善己・文芸評論家）

## ベストセラーズ

～9月第3週～　（税込み価格）

❶増田寛也「地方消滅」中央公論新社・886円
❷満尾正「40代からの『太らない体』のつくり方」三笠書房・596円
❸渡辺和子「面倒だから、しよう」幻冬舎・1028円
❹矢作直樹「おかげさまで生きる」幻冬舎・1080円
❺東田直樹「自閉症の僕が跳びはねる理由」エスコアール・1728円
❻久住昌之「孤独のグルメ　新装版」扶桑社・1234円
❼坪田信貴「学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話」KADOKAWA・1620円
❽渡辺和子「置かれた場所で咲きなさい」幻冬舎・1028円
❾木村藤子「あなたが、ここに生まれてきた理由」学研パブリッシング・1296円
❿中島京子「かたづの！」集英社・1944円

（日報岩手書店会・東山堂＝盛岡市中ノ橋通＝調べ）